

ダイヤモンドはじめて物語
～第90回までの歩み～



Ensemble Dimanche



目次

第1章 デイマンシュ誕生～第1回演奏会は失敗だった？	・・・	3ページ
第2章 デイマンシュの運命を決定付けた「四谷の土手の会談」	・・・	4ページ
第3章 デイマンシュの歩み～特筆すべき演奏会(第3回～第78回)	・・・	6ページ
第4章 「四谷会談」と新生デイマンシュの誕生	・・・	10ページ
第5章 新生デイマンシュの演奏会(第79回～第85回)	・・・	10ページ
第6章 コロナ禍における演奏会(第86回～第90回)	・・・	12ページ
あとがき	・・・	13ページ



ディマンシュはじめて物語～第90回までの歩み～

アンサンブル ディマンシュが生まれて苦節45年余り、定期演奏会も90回目を迎える。メンバーは時代とともに入れ替わり、現在では、発足に関わったメンバーは3人しか残っていない。その生き字引の一人から見た独断と偏見に満ちたディマンシュの歴史と思い出を綴ってみた。手前味噌か、あるいは内輪受けの内容かもしれないが、お暇なときに読んでいただきたい。

第1章 ディマンシュ誕生～第1回演奏会は失敗だった？

アンサンブル ディマンシュ(以下「ディマンシュ」という。)が生まれたのは、1976年の晩秋、当時、学習院大学管弦楽部で学生指揮者をして山本誠一郎氏(以下「指揮者」という。)の呼びかけによるものである。「ディマンシュ(dimanche)」とはフランス語で「日曜日」を意味するが、練習日が日曜日であることから指揮者が名付けたものである。今では笑い話だが、電話などで「デ(イ)・マンション」とか、「デ(イ)・饅頭」、「デ(イ)・満州」などと間違えられたものだった。これは本当の話。“di(ディ)”や“de(デ)”はイタリア語やスペイン語で英語の“of”に相当するため一応意味は通じるが。ちなみに演奏会は日曜日よりも、半ドン(半ドンターク=半日曜日。週休2日制でない頃、半日仕事をした土曜日のこと。)と呼ばれた土曜日の夜が多かった。その方が、翌日を気にしなくてゆっくり飲めるため。

当時、上智大学管弦楽部の2年生でヴィオラを弾いていた小生は、同じくヴァイオリンのM島氏から、「学習院大学のオケ(オーケストラ)でトラ(エキストラ)を集めるように頼まれているのだけれどやってくれない。」と持ち掛けられ、気軽に引き受けたのだった。当時の大学オケは一部を除きども人手不足で、お互いに手伝い合っていたので、そのような話はよくあることだった。ところが最初の練習に行ってみてびっくり。そこにいたのはほんの数人で、ヴィオラなど小生一人だったのだ。最終的にヴィオラは3人になったが、各人がソロのアンサンブルであった。トラどころか、後から参加費まで払う羽目になってしまった。「詐欺にあった」と思ったときは後の祭りだった。実際は、取り次いだM島氏の勘違いらしいが、小生は今でも「故意犯」だと思っている。もう時効だけど。ただし、幸か不幸か、この「勘違い」がなければ、小生は「ディマンシュ」という泥沼に足を踏み入れることはなかっただろう。ロッシーニのオペラに「幸せな間違い」というのがあるが、まさにそれを地で行くようなものかもしれない。

◇第1回演奏会(1977.1.7)～ブリヂストン美術館ホール <バッハの夕べ>

冬休みを返上しての練習の結果、翌1977年1月7日、記念すべき第1回演奏会が京橋にあったブリヂストン美術館ホールで開催された。もちろんこの時は第2回以降のことは考えられておらず、第1回というのは後に付けられた諡名のようなものである。プログラムはすべてバッハの作品、演奏者13人に対して聴衆は20人を数えるほどであり、演奏会の結果は惨たんたるものであった。管弦楽組曲第2番序曲のフーガでヴァイオリンに続くヴィオラが1小節遅れて出るという大事故が発生したのだ。当然、その後に出るチェロ・バスも1小節遅れて出たのだが、ヴィオラはすぐに気付いて1小節端折った。だが、チェロ・バスは1小節遅れたまましばらく進んでいた。フーガというのは、ずれても分かりにくいものではあるが、結局悲惨な演奏会になってしまった。練習では1度も間違えたことがないのに本番で間違えるとは、「魔が差した」としか言いようがない。小生はこのことがトラウマになり、バッハに限らずフーガやフガートが出てくると何かしら間違えるというジンクスに付きまとわれてきた。そのため次第にジンクスの根源となったバッハの演奏を避けるようになってしまうのである。事実、後の演奏会でバッハが取り上げられたときに降り番にしてもらったことさえある。その時「我が儘だ」と言われたが、そういう問題ではない。

この記念すべき第1回に参加し、今もなおメンバーとして活動しているのは、コントラバスの須賀敬亮氏、コンマスの時山響子(旧姓 原田)氏と小生(関口)の3名である。



中央のフルート吹き振り山本誠一郎氏



原田響子



関口孝司郎



須賀敬亮

第2章 デイマンシュの運命を決定付けた「四谷の土手の会談」

第1回演奏会の失敗を機に、誰もが次の演奏会はないと思った。ところが、1人だけそう思わなかった奴(もちろん指揮者である。)がいたわけで、執念深いというか何というか、午後8時半過ぎになると自宅に電話をかけてきては、「2回目をやろう。」と持ち掛けてきた。当時、午後8時の時間帯、テレビでは1時間ドラマが放映されており、この「8時半過ぎ」というのは、ドラマが丁度クライマックスを迎える時間である。推理ドラマだったら犯人が崖の上で告白する時間である。受ける方は非常に迷惑な時間であるが、わざとそれを狙っていたとも思われる。もっとも、携帯やメールというものがない時代なので致し方がないことではある。小生の家が大学から遠く、その時間でないと帰っていないということもあった。「三顧の礼」ではないが、熱意に負けて、とにかく話し合いには応じることにした。

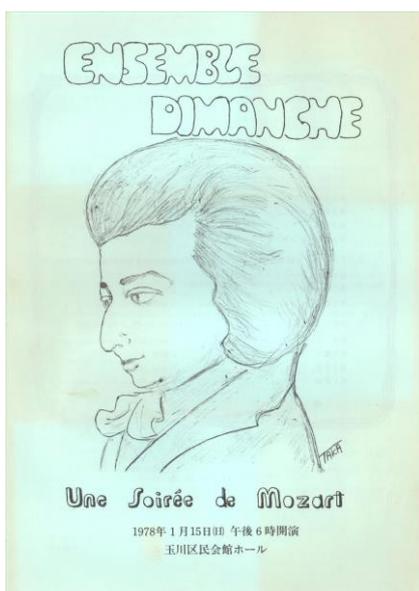
余談だが、1960年代に巨人で活躍した投手がよくこの時間帯にリリーフとして登場するので「8時半の男」と呼ばれていたことを思い出した。現在では、先発投手、リリーフ投手と専門職となっているのが普通であるが、当時はそのような専門性はなく、この投手がリリーフ専門投手の草分けだったらしい。

話を戻すと、場所は四谷の上智大学前にある土手の上、桜の名所である。この土手は、江戸城外濠の一つ真田濠の内縁であったが、この濠は埋め立てられ、上智大学のグラウンドになっている。ちなみにこのグラウンドには、千代田区・港区・新宿区の三区境があり、1周すると三つの区を巡ることができる。会談の出席者は、小生のほか指揮者、チェロのS木氏、コントラバスの須賀氏で、後者の二人はいずれも小生の同期である。ほかにもいたと思われるが定かでない。これがデイマンシュの運命を決定付けることになる「四谷の土手の会談(四谷会談)」である。S木氏は「やろうやろう」と積極派、小生は前述のとおりパッサ恐怖症のため「二度とやりたくない」と反対派、須賀氏は「どちらでもよい」という中間派(このいい加減な性格は今でも変わっていない。)だった。結局、指揮者の上手い口車に乗せられて、「今回のようなバロック・アンサンブルではなく、小編成でもいいからオーケストラ形式にする」という小生の申し入れた条件付で第2回演奏会の開催が合意された。ただし、一番積極的であったS木氏はその第2回から参加せず、一番反対していた小生が現在まで残っているのだから、世の中分らない。

◇第2回演奏会(1978.1.15)～玉川区民会館ホール<モーツァルトの夕べ>

こうして、第2回演奏会は、翌1978年1月15日にモーツァルトの作品を集めて等々力の玉川区民会館ホールで行われた。メンバーも27人に増え、管楽器はフルート、オーボエとホルンという小編成ながらオーケストラ形式の楽団として再出発を果たした。実質室内オーケストラであるが、「アンサンブル デイマンシュ」という名前には愛着があったのでそのまま残り、現在に至っている。この演奏会以降、演奏会は1月か2月と9月の年2回のペースで続けられてきたが、第1回と第2回との間に1年のブランクがあるのは、このような紆余曲折があったためである。

この演奏会でも事件は起きた。演奏中1stヴァイオリンの後ろの方で弾いていた一人の女性が突然舞台から消えたのだ。体調でも悪いのかと心配していたが、次の楽章で戻ってきた。後で聞くと、暖房の音がうるさかったので止めてもらいに行ったとのこと。確かに古い建物の暖房は音がしていた。時代を感じる。小生は気にならなかったが、繊細な人は気になるのだ。



プログラム表紙の挿絵、デザインは小生の作



「1stヴァイオリンの後ろの方で弾いていた女性」はこの後、30年のブランクの末、第80回(2017.2.18)より復帰している

閑人閑話—1～メンバーの出身大学

第1回と第2回のプログラムにはメンバーの大学名が記載されている。この時、多くは現役学生であった。これによると、第1回と第2回の間で人数とともに大学の数が倍増しているのが興味深い。第1回は上智大が7人、学習院大4人、慶応大・東大各1人の4大学13人。第2回は学習院大が9人、上智大8人、東工大・一橋大・明学大各2人、慶応大・都立大・東京理科大・早稲田大各1人の9大学27人となっている。大学数が増えているのは、各大学の有志が集まるジュネス・オーケストラに参加したメンバーがそこで知り合った人に声をかけていったことが理由と思われる。

第3回では学習院大派閥は衰退し、上智大が破竹の勢いで勢力を伸ばして最大派閥として第20回頃まで台頭していたが、その後衰退し、管楽器を中心に徐々に勢力を伸ばしていった東工大が取って代わり最大派閥となった。メンバーは時代とともに入れ替わっており、現在では大学派閥も平準化されていて、特定の大学がずば抜けて多いということはないが、やはり東工大オケ派閥(他大学出身で東工大オケに所属していた人を含む。)が若干多いかもしれない。

第90回の演奏会に発足当時のメンバーは3人しか残っていないが、いずれも不参加の演奏会があり、皆勤賞はいない。また、第20回までの10年間に加わったメンバーは10人残っている。意外に多いことが分かった。

閑人閑話—2～ディマンシュのメンバー勧誘法

メンバーが社会人となると、就職したり家庭を持ったりと、様々な都合でオケを辞めざるを得ない状況が出てくる。アマチュア・オケにとって、要員確保は永遠の課題である。そこでディマンシュによって展開された勧誘方法がいくつかある。なお、ネーミングはディマンシュ独自のものである。前述のジュネス・オーケストラのような優秀な人材が集まるオケに参加してそこで知り合った人や、他のオケにトラに行ってそこに来ている別なトラに声をかける「外交式勧誘法」、他のオケのトラを引き受ける代わりに、そのオケのメンバーに半強制的に来てもらう「バーター式勧誘法」、声をかけられた人が更に別の人に声をかけて増やしていくねずみ講のような「芋蔓式勧誘法」、他のオケの練習場に出没し、ディマンシュに合いそうな若い奏者に目を付け、直接交渉する「青田買い式勧誘法」など、涙ぐましい勧誘法が展開されてきた。



挿絵は、第8回(1981.1.17)プログラムより

閑人閑話—3～フランス語の発音と表記

団名のフランス語は“Ensemble Dimanche”だが、フランス人がこの語を発音すると「オンソンプル ディモンシュ」と聞こえる。「アンサンブル ディマンシュ」の中には、「アン」「サン」「マン」のように「アン」と表記される「鼻母音」が3つ含まれているが、これらの鼻母音は、いずれも「アン」より「オン」に近く聞こえるので、「ア」のように口を少し開けて、「オン」「ソン」「モン」と発音するとよりフランス語らしくなる。

鼻母音は鼻に抜ける母音で、母音なので伸ばしても音が変わらない。フランス語には4種類の鼻母音があり、スペルを見るとどの種類の鼻母音かが分かるが、カタカナで表記しようとする、「アン」と「オン」の2つで表記され、そのうち3種類が「アン」と表記されるので区別が難しい。なので、この「オン」と聞こえる鼻母音は発音どおり「オン」と表記した方がよいのではないかと思う。つまり“Ensemble Dimanche”は「オンソンプル ディモンシュ」と。この鼻母音を使っている語は、ほかに“Champs-Élysées(シャンゼリゼ)”や“encore(アンコール)”などたくさんがあるが、「ションゼリゼ」、「オンコール」のように表記し、そのまま発音すればフランス語に近くなる。

ただ、この場合、「オン」と表記する別の鼻母音があるので、少し厄介である。例えば“Bon jour(ボンジュール)”の「ボン」に含まれる「オン」であるが、こちらは、口をとがらせて「オン」と発音する別の鼻母音である。

ちなみに、「1本の美味しい白ワイン」を意味する“un bon vin blanc(アン・ボン・ヴァン・ブロン)”という言葉の中には4種類の鼻母音すべてが含まれているので、フランス語の初期の授業でよく言われたものだ。

第3章 ディマンシュの歩み～特筆すべき演奏会（第3回～第78回）

第2回演奏会の後、第3回、第4回へと半年サイクルで続いていくが、その行方は決して平坦な道のりではなく、ソ連が崩壊したようにディ連邦崩壊の危機は何度もあった。それを語っていくと長くなるのでここでは省略し、この章では、第3回から第78回までの演奏会のうち特筆すべきものを掻い摘んで紹介する。

◇第3回(1978.9.2)～東医健保会館ホール

第3回演奏会は、第2回の半年後に信濃町の東医健保会館ホールで行われた。メインはモーツァルトの交響曲第40番で、初めて木管楽器が揃った。中プロでハープも加わり、総勢35名の演奏会だった。

◇第4回(1979.1.28)～ルーテル市ヶ谷センター <バロック室内楽コンサート>

多くのメンバーが就職活動に入ったため参加できず、有志による「バロック室内楽コンサート」が行われた。主要メンバーが参加していないこの演奏会は、ディマンシュの演奏会としては正式には認められていない(という説がある)。この演奏会は小生を含むヴィオラのメンバーが誰も参加できず、大学のオケでコンマスの経験のある現団長の山口彰氏が指揮者の口車に乗せられて、ヴァイオリンからヴィオラに異動させられた。よほど居心地がよかったのか、この演奏会以降ヴィオラに居座ってしまい、今でもヴィオラを弾いている。

◇第5回(1979.9.8)～砧区民会館ホール

就職戦線から主要メンバーが戻ってきたこの演奏会の前プロは、モーツァルトの歌劇「フィガロの結婚」序曲で、この曲で総勢37人の完全二管編成のオーケストラとなった。また、この曲は以後のプログラムやアンコールで何度も登場し、ディマンシュの十八番となった。メインはモーツァルトのピアノ協奏曲第23番、ピアノソロはメンバーの一人、コントラバスの須賀敬亮氏であった。また、コンサートマスターは、この回から現在まで時山響子氏がその重責を担っている。

第2回とこの回のプログラムには、メンバー表と同じページに渉外、庶務、会計など係の分担表が載せられている。指揮者のワンマン経営と思っていたが、実は仕事を分担していたことが分かった。

◇第6回(1980.1.12)～東京都勤労福祉会館ホール

初めてベートーヴェンの交響曲(第1番)をプログラムに取り上げた。この回から第9回までは、八丁堀の東京都勤労福祉会館ホールで行われている。

この回のプログラムから、現在でも使用しているロゴマークを掲載している。このロゴマークは“Ensemble Dimanche”の頭文字“E”と“D”をあしらったものである。制作者については、当時のメンバーの知人のデザイナーと聞いているが、詳細は不明である。

◇第7回(1980.9.6)～東京都勤労福祉会館ホール

メインはベートーヴェンの交響曲第4番。その前に演奏されたフォーレの組曲「マスクとベルガマスク」は本邦初演の可能性あり。

◇第10回(1982.1.23)～こまばエミナース

京王井の頭線の駒場東大前駅前にあったこまばエミナースで初めて開催、記念演奏会としてベートーヴェンの交響曲第3番「英雄」を演奏した。この後第39回(1996.9.21)まで15年間、同ホールで演奏会が行われている。また、この年は創立5周年に当たり、別途記念パーティも行われた。

◇第11回(1982.7.24)～こまばエミナース <モツ・レク演奏会>

メインは合唱とのジョイントでモーツァルトのレクイエム(バイヤー版)であった。合唱のコール・ディマンシュは合唱団のメンバーを中心にこの日のために集められた。

◇第20回(1987.1.24)～こまばエミナース

創立10周年にも当たり、記念演奏会としてブラームスの交響曲第1番を演奏した。ブラームスということもあり、弦楽器の人数を増やして行おうとしたが、こういう時に限って出られなくなる人が出てくるのが世の常である。入社後数年経過すると、将来を嘱望される若きエリート達が国内や海外への転勤を命じられる時期に当たる。ディマンシュの中にもその「若きエリート達」が集中する時期であった。それでも、各大学の伝手を使って人材確保に東奔西走し、結果、弦楽器は1stヴァイオリンから順に10・10・10・7・5人で、総勢65名と、ディマンシュ始めて以来の大編成での演奏会であった。

◇ヘンデルのメサイヤによるクリスマス・イブ礼拝～頌栄教会

1980年代中期から1990年代前期まで、何回あったか正確には覚えていないが、毎年12月24日の夜に下北沢の頌栄教会のクリスマス・イブ礼拝で、同教会聖歌隊とともにヘンデルのメサイヤ(抜粋)を演奏している。この活動は、数人の有志によるもののため、ディマンシュの演奏会としては認められていないが、唯一残っている1990年のプログラムには、管弦楽:アンサンブル・ディマンシュ、指揮:山本誠一郎とはっきり書かれているので、ここに記しておく。

ここでの思い出のエピソードを2つ。このメサイヤ演奏、礼拝なので途中で牧師による長い説教があるのだが、その間演奏者はじっと次の曲の演奏まで待っていないといけない。その静かな中で突然「グー・グー」という音が聞こえてきた。何と隣の山口彰氏が首を垂れて眠っているのではないか。教会の中は暖かく、仕事の後で疲れているため仕方がないとは思いますが、何と不謹慎な。そっと弓で突いて起こしてやったが、ひやひやした。高い楽器を落としたらどうするのだ。また、別の回では、その説教の途中、礼拝に来ていた若い女性が突然倒れた。すぐに意識を取り戻し別室に連れていかれたが、締め切った中で数多くのロウソクを焚いていたため、酸欠になったようだ。教会での演奏も楽ではない。

◇第30回(1992.1.26)～こまばエミナーズ

記念演奏会としてチャイコフスキーの交響曲第6番「悲愴」を演奏した。弦楽器は1stヴァイオリンから順に10・9・9・5・3人、総勢63名の第20回以来の大編成での演奏であった。これ以後の記念演奏会では、諸事情により大編成にはしていない。記念として、ディマンシュの歴史や団員の言葉などを綴った冊子をガリ版刷りで作成し、プログラムに添えて配付した。

◇第33回(1993.9.25)～こまばエミナーズ

香港公演のプログラムの日本でのプレ演奏会だが、香港に行けない人も参加している。メインはドヴォルザークの交響曲「新世界」。

◇香港公演(1993.10.10)～香港大專會堂

チェロのF井氏が香港に転勤になって、現地で合奏団を結成した。名前は「アンサンブル・ディマンシュ香港」。後にHPで知った。無断で「ディマンシュ」の名前が使われたことに不満はあったが、ディマンシュへの未練と納得。そのF井氏が香港にいる間にと、本家ディマンシュの香港演奏旅行を計画、1993年10月10日に大專會堂で演奏会を行った。メインはドヴォルザークの交響曲「新世界」、海外公演の定番である。数年後F井氏は日本に戻るが、赴任地は何と大阪。残念ながら本家ディマンシュには帰らぬ人となった。

この香港公演では、ちょっとしたエピソードが残っている。「新世界」の第2楽章には有名なコーラングレ(イングリッシュホルン)が「遠き山に日は落ちて～」と歌う大ソロがあるのだが、コーラングレ奏者の山口高司氏は仕事の都合で先発隊より遅れて本番当日朝到着する予定であった。ところがその飛行機が更に遅れたため、リハに間に合わなかったのだ。本番には間に合うことを信じて山口氏不在のまま夜の演奏会を実施することとしたが、前プロ、中プロと進んでも現れなかった。そしてついに「新世界」の第1楽章が終わってしまった。まさにそのときである。舞台袖のドアが開き、山口氏が後光とともに登場したのだ。まるで映画の一シーンのように。一同胸を撫でおろしたことは言うまでもない。このエピソードはディマンシュの伝説として語り継がれてきた。だが、最近当人に聞いたところ、それはリハでの話で、本番は第1楽章から座っていたと指摘された。人の記憶は当てにならないものである。

◇第36回(1995.1.28)～こまばエミナーズ

メインのチャイコフスキーの管弦楽組曲第2番は本邦初演の可能性あり。任意だが4本又は2本のアコーディオンが入る珍しい曲。この日は2本のアコーディオンで挑戦。前プロのベートーヴェンの交響曲第1番は2回目。

◇妻沼で第九を歌う会(1995.11.26)～埼玉県・妻沼町中央公民館

コントラバスの須賀敬亮氏が埼玉県の妻沼(めぬま)町(現熊谷市)の銀行の支店長として赴任した関係で、妻沼町中央公民館で開催された「妻沼町町村合併40周年記念～妻沼で第九を歌う会」にオーケストラとして招待された。このときのオケの名称は「妻沼記念オーケストラ」だが主体はディマンシュである。当時、近辺市町村で市民による第九が演奏された記録はなく、その魁として町の自慢だったと聞いているが、この町は残念ながら平成の大合併で2005年に隣の熊谷市に編入されてしまった。また、かつては国鉄熊谷駅から東武妻沼線(正式には熊谷線)という鉄道が妻沼まで通じており、前面と後面に「湘南顔」と呼ばれる2枚の大窓を持った珍しい気動車が1両編成で走っていたが、この路線は惜しまれつつ1983年に廃止されてしまった。まことに「諸行無常」である。

演奏会終了後、長さ50～60cmある手の形をした特産の「大和芋」をお土産としていただいた。家でとろろにして食したが、長芋より粘り気が強く美味しかった。電車で持って帰るのは「よいじゃなかった」が。

◇第38回(1996.2.17)～こまばエミナース <シューマンの夕べ>

シューマンの作品を集めた演奏会。メインは交響曲第1番。中プロのピアノ協奏曲は、ディマンシュでは何度も協演している谷本美帆氏のソロ。

◇第39回(1996.9.21)～こまばエミナース

こまばエミナースでの最後の演奏会で、メインはシューベルトの交響曲第4番「悲劇的」。諸事情により急遽参加できなくなった人が多く出て、特にヴァイオリンの人材が集まらず、1st=3人、2nd=2人という史上最低の人数での「悲劇的」な演奏会であった。次の第40回(1997.2.15)ではそれぞれ4人、3人と少し好転したが、この人材難は第60回(2007.2.17)頃まで続く。

◇第40回(1997.2.15)～フィリアホール(横浜・青葉台)

第10回(1982.1.23)から第39回(1996.9.21)まで、15年にわたり演奏会を開催してきたこまばエミナースが閉館準備のため利用できなくなったため、横浜・青葉区民文化センターのフィリアホールで演奏会が行われた。メインはメンデルスゾーンの交響曲第4番「イタリア」。

こまばエミナースは、京王井の頭線・駒場東大前駅前にあった国民年金保養センターの一つで、ホテルが併設されていたため演奏会終了後、打上げや宿泊ができて非常に便利な施設であったが、2009年に民間に売却され、翌年閉館してしまった。これも諸行無常か。

◇第41回(1997.9.20)～府中の森芸術劇場

初めて府中の森芸術劇場で開催された演奏会。メインは交響曲でなく、ドゥリーヴのバレエ「 Coppélia 」抜粋。

◇第50回(2002.1.27/2.16)～草加市文化会館／府中の森芸術劇場

記念演奏会として、草加市文化会館と府中の森芸術劇場で同じプログラムの演奏会を2回開催した。たまたま二つの会場が取れたからだと思うが、その真相は闇の中である。メインはシベリウスの交響曲第2番だったが、諸事情により小編成で演奏した。

◇第51回～第58回<第1回ベートーヴェン・チクルス>

第51回(2002.9.21)のメインはベートーヴェンの交響曲第1番で、ここからベートーヴェン・チクルスが始まり、第58回(2006.2.26)の第8番まで順番にベートーヴェンの交響曲を演奏していく。

◇第53回(2003.9.28)～草加市文化会館ホール

2003年9月28日～10月4日まで草加市文化会館で開催された「コラボレーション・コンサート『音と形』」と題する草加市にゆかりのある人達による美術と音楽がコラボしたイベントのオープニング・コンサートを飾る。メインはベートーヴェン・チクルスの3回目で交響曲第3番「英雄」。

◇第60回(2007.2.17)～府中の森芸術劇場

記念演奏会として、大塚杏奈氏のヴァイオリン、民谷加奈子氏のヴィオラでモーツァルトのヴァイオリンとヴィオラのための協奏交響曲を協演。メインはメンデルスゾーンの交響曲第3番「スコットランド」。

◇第63回～第71回<交響曲第1番シリーズ>

ディマンシュは、あまり知られていない作曲家や知られている作曲家でもあまり演奏されない隠れた名曲をシリーズとして積極的にプログラムに取り上げてきた。第63回(2008.10.11)のメインは、弱冠25歳で没し、スペインのモーツァルトと呼ばれたアリアーガの交響曲(1曲しかないので実質第1番)であった。続く第64回(2009.1.25)は有名なブラームスの交響曲第1番であったが、以降、第65回(2009.9.20)はメンデルスゾーン、第66回(2010.1.31)はカリンニコフ、第67回(2010.9.20)はボロディン、第68回(2011.2.12)はグノー、第69回(2011.9.24)はグラズノフ、ひとつ跳んで第71回(2012.9.2)はメーユールと、あまり演奏されない「交響曲第1番」をシリーズで取り上げた。

◇第64回(2009.1.25)～草加市文化会館

メインは第20回に次いで2回目となるブラームスの交響曲第1番。2曲目のカリンニコフの二つの間奏曲は本邦初演の可能性あり。3曲目は民谷加奈子氏のヴィオラソロでホフマイスターのヴィオラ協奏曲ニ長調。

◇第65回(2009.9.20)～狛江エコルマホール

東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団コンサートマスター戸澤哲夫氏をソリストにお迎えし、ベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲を初協演。メインは交響曲第1番シリーズの一環でメンデルスゾーンの交響曲第1番。

◇第70回・第74回～第76回<交響曲第3番シリーズ>

第70回(2012.2.12)は記念演奏会として第10回記念で演奏したベートーヴェンの交響曲第3番「英雄」がメイン。前プロはシュポーアの交響曲第3番で「交響曲第3番の演奏会」であった。少し跳んで第74回(2014.2.9)はフランスの女性作曲家ファランク、続く第75回(2014.9.15)はメンデルスゾーン、第76回(2015.2.1)はシベリウスのそれぞれ交響曲第3番をシリーズで取り上げた。

◇第74回(2014.2.9)～府中の森芸術劇場

フォーレ、ドビュッシー、ファランクとフランスの作曲家の作品を集めた演奏会。メインのファランクの交響曲第3番は本邦初演の可能性あり。

この日の朝は、前日朝から深夜まで降り続いた雪がかなり積もっていた。都心で26cmという記録的な積雪であった。雪は既に止んでいたため交通機関への影響はさほどでもなかったが、大きい楽器は運搬がたいへん。千葉県で松戸に住んでいるコントラバスの首席奏者は、「車が家から出せない」という理由で演奏会をドタキャン。千葉県では30cm以上の積雪だったらしいが。たまたまこの演奏会は、コントラバス奏者が3人おり、他の2人は車や電車などで来場できたので、首席奏者なしとは言え一応難を逃れた。いずれにしても、大雪が1日ずれたことは運がよかったと言える。

◇第78回(2016.2.7)～ルネこだいら

メインはチャイコフスキーの交響曲第1番「冬の日の幻想」、中プロは隠れた名曲シリーズの一環でサン=サーンスのアルジェリア組曲。

結果的にこの直後に勇退する山本誠一郎氏の最後の指揮となった。また、チューバが入るプログラムのときの常連の団友だったチューバ奏者の石崎雅人氏は、この2年後に急逝し、これがディマンシュ最後の演奏会となった。

合宿はじめて物語



はじめての合宿は、第3回の鹿沢高原合宿(1978.8)。当時は皆貧乏だったため自炊にしたが、食事当番が忙しくてロクに練習できず、その後は食事付きになった。



恒例の「DIMANCHE」人文字 第5回河口湖合宿(1979.8)



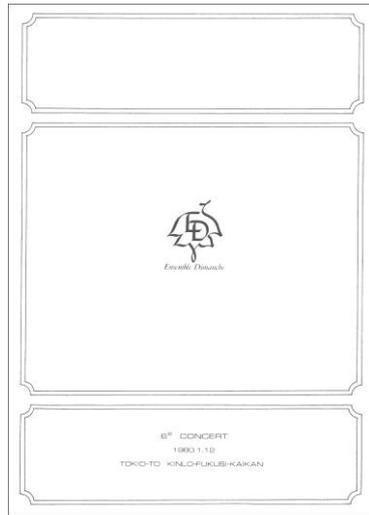
恒例の「DIMANCHE」人文字 第26回養沢センター合宿(1990.1)

ロゴマークはじめて物語



Ensemble Dimanche

ディマンシュロゴマークは、当時のメンバーが、知人のデザイナーに委嘱したもの。以降現在まで40年以上、団の関連書類には必ずこのマークが挿入されている。

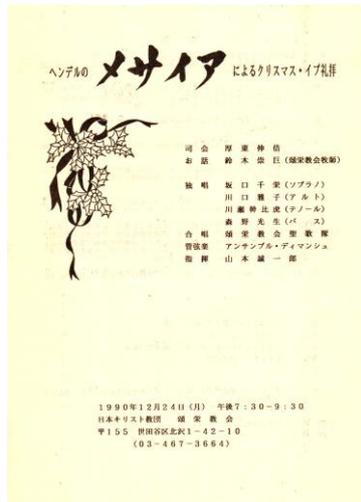


はじめての登場は、
第6回(1980.1.12)プログラム裏表紙



第5回(1979.9.8) プログラム表紙
良く見ると、飾り枠の下中央にマークの一部が見える。

ヘンデルのメサイアによるクリスマス・イブ礼拝～頌栄教会



プログラム(1990.12.24)

演奏旅行はじめて物語



はじめての演奏旅行(1993.10)は、返還前の香港へ。公式には演奏旅行だが、内実は観光旅行の色合いが強かった(ような気がする)。
ベートーヴェン「皇帝」のソリストであった谷本美帆氏とは、その他にもラフマニノフ、グリーグ、シューマン、モーツァルト等、数多くのピアノ協奏曲を協演している。

第4章 「四谷会談」と新生ディマンシュの誕生

第78回(2016.2.7)演奏会が終わった後、次の演奏会の準備に取り掛かろうとしていたまさにその時、新たな事件が勃発する。創立時から当団を牽引してきた指揮者が個人の事情により退任したいと申し出たのである。演奏会場が取れていることもあり、区切りのいい第80回までは続けるということであった。指揮者ではあるが、同時に責任者でもあり雑用係として運営の一切を切り盛りしてきた同人はいわば扇の要。退任は、すなわちディマンシュの解散を意味する。急遽、後に運営委員となる古いメンバーなどが招集されて、この案件について協議した。この会議では、「ディマンシュにおいては、指揮のみならず運営など一切の仕事をほぼ一人でこなしてきた指揮者の存在は大きく、同人抜きには語れないのも事実ではあるが、同人が退任しても歴史あるディマンシュを存続させたい。」という意見が大勢を占め、さらに、「同人が自ら創ったディマンシュの退任を表明するというのは、よほど大変な事情を抱えているに違いない。それなら、第80回を待たず、次回からでも運営は自分たちで分担し、指揮はプロの指揮者をお願いしよう。」と結論付けた。そこで、第79回の選曲会議が予定されていた3月27日にこの案件を諮ることとし、緊急事態としてできるだけ多くの参加者を募った。場所は四谷の土手ならぬ「しんみち通り」にある某喫茶店の個室だった。40年ぶりの「四谷会談」である。ちなみに、小生が学生だった当時、しんみち通りは学生が通う安い飲み屋が多かったが、その喫茶店は当時からその入口に構える老舗である。当初、メンバーの中には指揮者のシンパが多く、同人の退任に伴って辞める人が続出するのではないかと危惧された。ところが、蓋を開けてみると意外だった。特段の反対意見はなく、この案件は満場一致で了承された。

さて、ここに「新生ディマンシュ」が誕生するのであるが、最初はすべてが手探りであった。まずは、組織づくりから。前述のようにディマンシュはワンマン経営であったため、他の団体にみられるような運営の組織がなかった。そこで、指揮者の側近であったコンサートマスターの時山響子氏を中心になって「運営委員会」なるものを創り、渉外・会計・企画・広報・ライブラリアンなどの仕事を分担することとした。そしてそこで新たな責任者として団長を選任、団長にはヴィオラの山口彰氏が就任した。次に新しい指揮者の選任であるが、メンバーの伝手では当てがなかった。そこで団員の二人がメンバーになっている別の合奏団を指導されていた東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団(シティ・フィル)コンサートマスターの戸澤哲夫氏にディマンシュの事情を話し、このようなオケを引き受けてもらえる若手の指揮者はいないかと相談した。そこで戸澤氏から推薦していただいたのが、2013～14年度にシティ・フィルの指揮研究員だった平川範幸氏である。平川氏には第79回(2016.9.17)から現在まで指揮をお願いしている。(ただし、2019年の第84回と第85回を除く。)さらに2018年頃から当団のスキルアップを図るため、前述の戸澤氏にもトレーナーとして練習を指導していただいている。

なお、退任した山本誠一郎氏は、次の第79回演奏会より、会場受付とステージマネージャーとしてディマンシュを陰で支えている。

第5章 新生ディマンシュの演奏会 (第79回～第85回)

新生ディマンシュでは、来場者を増やすため、様々な新しい施策に取り組んできたが、特に広報活動に力を入れてきた。演奏会はそれぞれテーマを決め、「今回の聴きどころ」として演奏会のテーマや魅力をHPやパンフレットに掲載することとした。ただし、多くの場合テーマを決めて選曲するのではなく、選曲されたプログラムを見て後からテーマを考えるのだが、これが頭を悩ます、なからよいじゃねえ作業なのである。こうして、徐々に来場者も増えていった。(注:「なからよいじゃねえ」とは、澁澤榮一も使っていた埼玉県北部と群馬県(上武地方)の方言で、「かなり大変な」という意味。)

◇第79回(2016.9.17)～府中の森芸術劇場 <珍しい改訂版による演奏～メンデルスゾーン:交響曲第4番>

この回から第83回(2018.9.23)まで指揮は平川範幸氏。メインにメンデルスゾーン自身が1834年に改訂した交響曲第4番「イタリア」の改訂版を演奏。一般に演奏されているのは改訂前の初稿版で、この改訂版は存在自体ほとんど知られていない。アンコールは、新生ディマンシュ発足記念として団員が管弦楽用に編曲したメンデルスゾーンの無言歌ニ長調Op.109。

◇第80回(2017.2.18)～府中の森芸術劇場 <珍しい初稿版による演奏～シューマン:交響曲第4番>

シューマンは1841年に作曲した2番目の交響曲を1851年に改訂している。この交響曲の改訂版は第4番として出版されたが、一般に演奏されているのはこの改訂版である。この回の演奏会ではこの版ではなく、ほとんど演奏されない1841年の初稿版を使用。アンコールは40周年記念特別アンコールとして団員がジェレンスキーのピアノ四重奏曲第2楽章を管弦楽用に編曲した「ロマンツァ」。

◇第81回(2017.9.23)～タワーホール船堀 <オール・ブラームス・プログラム>

ブラームスの作品集で、メインは交響曲第2番。ブラームス自身が希望していた小編成での演奏。中プロは、戸澤哲夫氏をソリストに迎えてヴァイオリン協奏曲を協演。指揮の平川氏はシティ・フィルの指揮研究員だったときに戸澤氏から助言と指導を受けており、平川氏にとって戸澤氏はいわば恩師。その師弟の初協演が実現。前プロはブラームス自身が管弦楽に編曲したハンガリー舞曲第1番。

◇第82回(2018.2.1)～彩の国さいたま芸術劇場 <隠れた名曲シリーズ～サン=サーンス:交響曲第2番>

サン=サーンスの交響曲は第3番が有名でよく演奏されるが、その他はほとんど演奏されることはない。隠れた名曲シリーズの一環として二管編成でコンパクトな交響曲第2番を取り上げた。メインはモーツァルトの交響曲第41番「ジュピター」であった。

あいにくこの日の午後は、低気圧の通過で一時的に荒れた天気。また、羽生結弦選手が出場する平昌オリンピック・フィギュアスケートの男子フリーの時間帯とも重なってしまった。そのためか、来場者は少な目であった。ただし、本当にそれが原因かどうかは不明。

◇第83回(2018.9.23)～川口総合文化センター <古典派三大巨匠のプログラム>

ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンの古典派三大巨匠の作品を集めた王道プログラム。メインはベートーヴェンの交響曲第1番で、この回から結果的に第2回ベートーヴェン・チクルスが始まるのだが、このときは、まだベートーヴェン・チクルスを行う予定はなかった。

◇第84回(2019.2.9)～彩の国さいたま芸術劇場 <若くして逝った天才作曲家たちの作品>

指揮はこの回のみ平林遼氏。プログラムは若くして逝った天才作曲家、モーツァルト(35歳)・シューベルト(31歳)・ビゼー(36歳)の作品。

アンコールは、演奏会を待たずして1月に急逝したホルン奏者小磯治氏のための追悼特別アンコールで、シューベルトの「アヴェ・マリア」の管弦楽編曲版を演奏、チューブラー・ベル(鐘の音)を入れて哀悼の意を表した。

◇第85回(2019.9.22)～タワーホール船堀<作曲家自身による曲の「転用」>

指揮はこの回のみ澤村杏太郎氏。作曲家自身が他の曲に転用したり、他の曲から転用した作品を集めた。「ロザムンデ」序曲に転用されたシューベルトのイタリア風序曲第1番、セレナーデから転用されたモーツァルトの交響曲第35番、そしてメインは、ピアノ三重奏曲に転用されたベートーヴェンの交響曲第2番。

実は、選曲会議ではチャイコフスキーの交響曲第3番「ポーランド」がメインに選ばれたが、メンバーの急逝や諸事情により大編成の曲を取り上げる状況になかったことから急遽差し替えられたもの。しかし、たまたま前々回の第1番から繋がったこの偶然が、次の演奏会での交響曲第3番「英雄」へとつながり、第2回ベートーヴェン・チクルスとして続いていく。

旨い酒と旨い肴はアンサンブルの潤滑油



第83回合宿(2018.8)



第86回合宿(2020.1)



第84回忘年会(2018.12)



第86回忘年会(2019.12)

第6章 コロナ禍における演奏会（第86回～第90回）

2020年1月に新型コロナが日本に上陸し、アマチュア・オーケストラは未曾有の危機を迎えた。もちろんディマンシュ崩壊の危機は何度も経験したが、これほどの危機は経験したことがない。緊急事態宣言が何度も出され、不要不急の活動が制限される中、幸いにもディマンシュは予定の演奏会を中止することなく、続けることができた。編成の小さいオケであったことがよかったのかもしれない。

コロナ禍において、大変なことはいろいろあった。特に練習場の確保が最大の課題であった。練習場では人数制限が設けられたため、大編成のオケが使うような広い施設が必要となりその確保に奔走した。広い練習場の借用となれば当然経費も増加する。そうなるとディマンシュのような少人数のオケでは、個人の負担も馬鹿にならない。しかし、メリットもあった。演奏会を開催する団体が少なかったせい、むしろ通常より来場者が増えたこと、他のオケと掛け持ちしている人が、他のオケの演奏会中止等でディマンシュに集中するようになり、練習の出席率が上がったことなどである。これらは平常に戻った後も続いていくことを願いたい。

◇第86回(2020.2.15)～府中の森芸術劇場 <「英雄交響曲」初演時のプログラム>

指揮はこの回から平川範幸氏が復活、現在に至る。メインは、第2回ベートーヴェン・チクルスの3回目として交響曲第3番「英雄」。前プロには、「英雄」がウィーンで公開初演されたときにシリーズの演奏会で同じく初演されたエーベルルの交響曲変ホ長調。隠れた名曲シリーズの一環。「英雄」よりもエーベルルの方が好評だったと伝わる。

この演奏会は、コロナ上陸のまだ1ヵ月後ということもあり、影響はほとんどなかった。その後、4月7日には緊急事態宣言が出され、5月25日まで続いたが、4月以降の演奏会を予定していたオーケストラは会場からの勧告などもあり、軒並み中止を余儀なくされたので、ディマンシュは運がよかったと言える。

この演奏会の模様を綴った「ベートーヴェン<英雄>と同時期に初演されたエーベルルの『交響曲』と題する記事が、月刊「音楽の友」2020年4月号「Scramble Shot」欄に掲載された。記事の内容は次のとおり。「生誕250年の企画が続々と開催されるなか、『交響曲第3番<英雄>』が初演されたのと同じ演奏会シリーズで初演されたというアントン・エーベルル(1765～1807)の『交響曲変ホ長調Op.33』が、平川範幸指揮によるアンサンブル・ディマンシュの第86回演奏会で取り上げられた(2月15日、府中の森芸術劇場 ウィーンホール)。学習院大学、上智大学のオーケストラ部メンバーらが1776年に結成したアマチュア団体で、現在は幅広い年代が在籍。戸澤哲夫(vn)を定期的にトレーナーに招くなど、熱心に演奏力の向上に努めている。(中略)1999年録音のコンチェルト・ケルンによるディスクはあるが、実演としてはかなり珍しく、日本初演の可能性もある。(中略)アンコールとして、『ピアノ・ソナタ第8番<悲愴>』第2楽章が奏でられ、会場は暖かい拍手に包まれた。なお団体名の『ディマンシュ』は仏語で日曜日を指す。まさに日曜音楽家たちの地道な研鑽が結実したコンサートであった。」

◇第87回(2020.9.13)～府中の森芸術劇場 <ちよつと訳ありの作品集～その訳とは？>

様々な理由で演奏されることが少ない作品を特集。中の1曲が有名過ぎて全曲が演奏されることが少ないバッハの管弦楽組曲第3番、日本では知られていないフランスの女性作曲家ファランクの交響曲第3番、メインは第2回ベートーヴェン・チクルスの4回目で、二つの傑作に挟まれて目立たない交響曲第4番。

緊急事態宣言が5月に解除されたものの、その影響はさらに続いた。ディマンシュにおいても、職種や家庭の事情によって練習への参加が難しく、演奏会の参加辞退を考える人も出てきた。練習会場も制限されるなど、演奏会に黄色信号が灯ったが、ディマンシュとしては、「本番会場からの中止要請がない限り、まずはコロナ対策をしっかりとこの演奏会に向かって邁進する」という方針を決めた。来場者にはコロナ対策の協力をお願いした。コロナ禍で来場者が少ないことを懸念したが、演奏会を開催する団体が少なかったせい、むしろ通常より多かったのが幸いであった。アンケートには、「このような状況下にも関わらず演奏会を開催してくれたことにむしろ感謝する」との意見が多かった。ただし、楽しみの一つである演奏会終了後のレセプションが中止されたのは残念であった。

◇第88回(2021.2.21)～府中の森芸術劇場 <隠れた名曲シリーズ～シューベルトの「イタリア交響曲」>

メインは第2回ベートーヴェン・チクルスの5回目で交響曲第5番「運命」。この回のテーマの中心は、中プロのシューベルトの交響曲第3番。この曲は「イタリア交響曲」と呼んでもよいほどイタリア的である。しかし、ロッシェニの影響については、ほとんど取り沙汰されていない。そこで、この曲以前のロッシェニの序曲を調査していくと、歌劇「幸せな間違い」序曲の第2主題がこの交響曲の第1楽章第2主題によく似ていることを発見。ロッシェニの影響を確信した。アンコールにその序曲を演奏して聴き比べてもらった。アンコールとしては本来タブーだが、説明文をプログラムとともに配付し、予告をしてのアンコールだった。

この年は、1月7日に2回目の緊急事態宣言が発出され、延長、延長で3月21日まで続いた。この演奏会は、まさに緊急事態宣言の延長下で、開催が危ぶまれたが、2年目の慣れもあり、条件も前年よりは少し緩和されたため、無事開催された。

◇第89回(2021.9.24)～タワーホール船堀 <名曲の陰にサリエリあり?>

巷の悪評とは裏腹に、サリエリはウィーンの宮廷楽長として音楽監督・指揮者として活躍したほか、若き作曲家達に多大な影響を与えた教育者でもあった。この回はサリエリの作品とサリエリから直接的又は間接的に影響を受けた作曲家の作品をプログラムに。前プロは、「田園」の第4楽章「嵐、雷雨」のモデルになったとも伝わるサリエリの序曲「海の嵐」、中プロは隠れた名曲シリーズの一環でサリエリの孫弟子に当たるヴォジーシェクの交響曲ニ長調、メインは第2回ベートーヴェン・チクルスの6回目で、サリエリの弟子ベートーヴェンの交響曲第6番「田園」。サリエリとヴォジーシェクのプログラムは、思いのほか反響が大きく、それを目当てに来てくださった方もいた。

3回目の緊急事態宣言が4月25日～6月20日、4回目が7月12日～8月22日に発出されたが、6月頃からメンバーの間にワクチン接種が浸透していったことも相まって、この演奏会も無事終了した。だが、相変わらずレセプションの中止が続いたのは残念。

◇第90回(2022.2.11)～府中の森芸術劇場 <オール・ベートーヴェン・プログラム>

記念演奏会として、戸澤哲夫氏をソリストにお迎えし、ベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲を協演。メインは第2回ベートーヴェン・チクルスの7回目で交響曲第7番。前プロも序曲「コロラン」でディマンシュ初のオール・ベートーヴェン・プログラム。

コロナにも負けず、ディスタンスにもめげず



最初の緊急事態宣言あけの練習(2020.6.20)



入室人数制限で、広い練習会場が必要になった(2020.8.9)



演奏会場も定員の二分の一。着席禁止のカードがむなしい(2021.9.18)



演奏会後の楽しみの打ち上げもできず、舞台上で挨拶して解散(2021.2.21)

あとがき

第90回はコロナ禍での5回目の演奏会となる。昨年収束しつつあった感染者数が、新年になって新種の変異株によって驚異的な増加となっている。蔓延防止等重点措置も発令されて予断を許さない状況であるが、演奏会が無事終了することを祈っている。

文中で「アンサンブル・ディマンシュ」、「アンサンブル ディマンシュ」と「・」があるのとないのとが混同されていることに気付いた方もいらっしゃるだろう。創立時から新生ディマンシュ誕生までは前者が正式名として使われていた。だが、この間もHPなど一部では後者も使われており、併用されていた。新生ディマンシュ誕生を機に、運営委員会においてHPに合わせて「アンサンブル ディマンシュ」に統一することに決定した。HP担当を中心とする維新派に、正式名を踏襲したい旧幕派が押し込まれたためである。ただ、文中に出てくる時はスペースだと文の区切りと間違われ易いので、文章を書くことが多い企画担当を中心とする旧幕派の残党は、「・」の復活を願って身を潜めている。

さて、次の目標は5年後の「第100回」であるが、メンバーの一部は70歳を超えてしまう。果たしてそれまで楽器を弾くことができるのか分からないが、一回、一回行けるところまで歩むしかない。それまでに定期演奏会では取り上げていない「第九」もやっておきたい。第100回演奏会で、「第100回までの歩み」としてこの物語が追加できることを楽しみにしている。



第90回練習風景(戸澤哲夫氏)
(2022.1.23)



第90回演奏会チラシ

編集後記

コンマスの時山響子氏(通称ハラキョー)は45年前から、ディマンシュに関するあらゆる資料を保存している。おかげで今回もたいへんに助かった。ここに感謝を述べたい。その資料によると第90回までの演奏会に参加したメンバーは延べ700名近くに上る。10回以上参加している人を出演回数順に列記した。(網掛けは第90回 参加者)

氏名	パート	初出演	回数	氏名	パート	初出演	回数	氏名	パート	初出演	回数	氏名	パート	初出演	回数
時山響子	ヴァイオリン	第1回	89	鴨狩公一	トランペット	第39回	34	松本圭右	クラリネット	第22回	19	松村 寛	ヴァイオリン	第2回	12
関口孝司郎	ヴァイオリン	第1回	88	星野武徳	ティンパニ	第21回	32	杉井孝則	オーボエ	第12回	18	榎本 学	ヴァイオリン	第13回	12
山口 彰	ヴァイオリン	第2回	87	越野圭子	ヴァイオリン	第2回	30	町田めぐみ	ヴァイオリン	第56回	18	藤井昌弘	チェロ	第17回	12
下山純也	ヴァイオリン	第2回	81	西村 卓	トランペット	第10回	30	関根佳子	ヴァイオリン	第74回	18	小河秀太	チェロ	第30回	12
越島康太郎	ファゴット	第11回	80	浅井昭成	クラリネット	第47回	30	山口直美	フルート	第19回	16	菊池和俊	ヴァイオリン	第62回	12
山本誠一郎	指揮	第1回	78	鞠谷雄士	クラリネット	第3回	29	井上 健	チェロ	第21回	16	星野未央	ファゴット	第79回	12
須賀敬亮	コントラバス	第1回	78	越野昌芳	フルート	第2回	28	大川富雄	トランペット	第24回	16	岩崎大介	フルート	第2回	11
山口高司	オーボエ	第5回	78	吉年直紀	コントラバス	第20回	28	千秋修子	ティンパニ	第26回	16	日野達夫	ヴァイオリン	第6回	11
小磯 治	ホルン	第10回	62	高木博央	ホルン	第14回	27	笹子滋正	クラリネット	第38回	16	福島晶子	ヴァイオリン	第12回	11
市川亜理	オーボエ	第27回	62	森 未知	ヴァイオリン	第64回	27	都筑 裕	ティンパニ	第46回	16	中塩 哲	トロンボーン	第14回	11
高崎 明	ホルン	第3回	61	南 達郎	ヴァイオリン	第13回	25	吉澤輝彦	ファゴット	第65回	16	緒方 淳	チェロ	第30回	11
千秋和久	ヴァイオリン	第14回	59	鈴木千暁	クラリネット	第51回	25	石嶺寿子	ヴァイオリン	第76回	16	浅野雅子	オーボエ	第42回	11
三瓶政一	ヴァイオリン	第3回	57	本山まり子	ヴァイオリン	第2回	24	田畑祥生	チェロ	第22回	15	福島有希子	チェロ	第52回	11
松島和彦	ヴァイオリン	第1回	55	内田伸志	ファゴット	第3回	23	高橋幸秀	コントラバス	第6回	14	戸澤哲夫	ソリスト・トレーナー	第65回	11
由川 裕	ホルン	第8回	45	石崎雅人	チューバ	第14回	23	長澤 澄	ヴァイオリン	第61回	14	山上孝秋	指揮	第80回	11
油谷伸一	ヴァイオリン	第1回	42	伴 豊	チェロ	第14回	23	西川富之	ヴァイオリン	第66回	14	鞠谷奈保子	クラリネット	第10回	10
西村 実	ヴァイオリン	第29回	40	荒井恵美	トロンボーン	第42回	23	町田明子	ホルン	第70回	14	菊地照夫	ティンパニ	第17回	10
福田重徳	フルート	第38回	37	網野公一	ホルン	第8回	22	江川博之	コントラバス	第77回	14	鴨狩布美子	トランペット	第45回	10
浅見壮一	ヴァイオリン	第2回	36	三次撰子	チェロ	第66回	22	水野なほみ	ハーブ	第19回	13	池上雅人	チェロ	第62回	10
桜田由香里	ヴァイオリン	第18回	36	飛田吉春	ヴァイオリン	第11回	21	時山 正	ヴァイオリン	第20回	13	吉澤明子	ヴァイオリン	第65回	10
徳植俊之	フルート	第13回	35	高橋恵子	チェロ	第1回	20	鹿島 亮	ヴァイオリン	第20回	13	荒川奈月	ヴァイオリン	第69回	10
中野裕司	トロンボーン	第14回	34	久保田兼士	コントラバス	第5回	20	井上麻里	ヴァイオリン	第35回	13	平川範幸	指揮	第79回	10
桜田健彦	トロンボーン	第28回	34	柴野かおり	ヴァイオリン	第70回	20	森合利之	ホルン	第68回	13	菌部晴信	トランペット	第81回	10

表題 ディマンシュはじめて物語～第90回までの歩み～
 著者 多賀 史郎(関口 孝司郎)
 発行日 2022年2月11日
 発行者 アンサンブル ディマンシュ
 発行責任者 山口 彰
 編集 山口 彰
 資料提供 時山 響子
 *非売品

ダイヤモンドはじめて物語
～第90回までの歩み～



Ensemble Dimanche